## 22. 脳単独転移を来した卵巣癌（明細胞腺癌）Ⅰ期の症例

静岡赤十字病院　産婦人科
○安康真由香、市川　義一
井関　　隼、加藤　　恵
猪飼　　恵、江河由紀子
鈴木まり子、根本　泰子
服部　政博

卵巣癌の脳転移は稀だが、明細胞腺癌の脳単独転移を来した症例を経験したため報告する。症例は57歳０経妊０経産。55歳時10月頃より急激な腹囲増大を認め、当院を受診した。診察では多房性の卵巣腫瘍を認め、画像検索で傍大動脈リンパ節腫脹と腹膜播種を示唆され、卵巣癌が疑われた。同年12月単純子宮全摘出術、両側付属器切除術、骨盤内及び傍大動脈リンパ節郭清、大網亜全摘、虫垂切除術を行った。病理組織学検査では被膜浸潤を伴う明細胞腺癌で、リンパ節転移や遠隔転移を認めず、卵巣癌（明細胞腺癌）Ⅰc（b）期（旧分類）（pT1cN0M0）と診断した。術後化学療法としてddTC６コースを施行した。術後１年２ヶ月時、強い嘔気とめまいを訴え、頭部MRI検査で左小脳に孤発性のring enhancement及び浮腫を伴う占拠性病変を認め、脳転移が疑われた。同時期の全身CT検査では、他臓器への転移を認めなかった。開頭脳腫瘍生検が施行され、病理組織学検査では明細胞腺癌の診断で、卵巣組織と同様の所見であった。開頭脳腫瘍摘出術後、現時点で全身状態良好である。卵巣癌の肺転移を伴わない脳転移例は稀で、中でも明細胞腺癌は報告例が極めて少ない。予後因子の検討も含め、今後の症例の蓄積が待たれる。